

宗長と宗碩

——宗長評をめぐって

岩 下 紀 之

1

連歌師は連歌創作の能力のほかに、会席での作法、後援者との接触、古典の学習など、多方面の活動が求められ、それらの修得には実力ある連歌師に近侍して指導を受けることが必要であつたろう。ここで探ろうとする宗長・宗碩は、最大の連歌師宗祇のもとで修行を積むことができた。宗祇は長寿に恵まれた人であり、二人の修行の時期にはかなりのへだたりがある。宗長が文安五年、宗碩は文明六年の生れで、年齢差二十六年である。

宗長は早く文正元年に宗祇に会つており、その後文明十年以後、越後、中国、九州の旅に同行、水無瀬三吟、湯山三吟に同座、『新撰菟玖波集』撰にも協力している。宗祇の古典講説を筆記し、伊勢、源氏、百人一首の注釈に関わっている。当然その間の連歌会で、連歌師としての全般的な指導を受けていたことであろう。

宗碩は明応四、五年頃から宗祇に師事したと見られ、宗祇が最後の旅を意識したと思われる明応八年正月四日の何船百韻に、宗祇、宗長らと同座、越後から関東への最後の旅に近侍し、文龜二年四月廿五日の伊香保三吟に加わり、同年の宗祇死去に邂逅して追善の百韻を宗長と両吟している。宗長は師の最盛期に、宗碩は師の最後の旅に、それぞれめぐりあわ

せ、時期は違うが宗祇門下の有力な弟子であった。宗長は師の旅の最後の時期に駿河から駆け付けて死を見取り、諸事をとりしきり、終焉の記を執筆して都に知らせるなど、宗祇門下の筆頭としてふるまっている。この時宗長は五十五歳、宗碩は二十九歳で、師を失なった宗碩としてはまだしかるべき指導者を必要としたであろう。同門の兄弟子である宗長に兄事するのは自然で、両者が駿河と尾張を出身地としていること、さらに宗長が島田の鍛冶職人の家の出であるのに対し、宗碩もまた鍛冶の子であるとの伝承があり、このようなことも両者の親しさの元にあったかもしれない。

2

現存する宗碩句集については余語敏男氏の研究があり、本稿はそれに依据して考えてみたい。『宗碩と地方連歌』に句集の解題と研究が収録されている。

一 宗碩百句

二 宗碩付句

三 宗碩回章（白井本）

である。この内、一と三に宗長評がある。肖柏の付点があるのは『宗碩付句』であるが、この後半が『宗碩回章』の句集部分である。これらの本文についていえば、一の『宗碩百句』は『連歌貴重文献集第九集』に影印がある。本稿ではこれに前句・付句それぞれに算用数字を用いて通し番号をふり、引用する。『宗碩回章』は余語氏の御著書に、『宗碩付句』の後半部の形で翻刻があり、漢数字によって、前句・付句を一単位として通し番号が付されている。『宗碩回章』は他に京大平松本があり、句集部分は白井本より句数が少ないが、白井本が欠く書状の部分を伝えている。本稿では句集の部分は余語氏の翻刻により、書状部分は平松本によることとする。

各句集の成立について余語氏は考察され、『宗碩付句』には、明応九年七月十一日の百韻、文龜二年四月二十五日の伊香保百韻の句を発見され、「この三句は宗碩の初期のものであるから、宗祇没後程ない時期の成立かも知れない」と結論された。文龜二年八月六日の、宗長・宗碩両吟の宗祇追善の百韻の句が見えないので、それ以前の成立との可能性も指摘しておきたい。なお、

45 かはるに何かのこるおもひて

46 うくつらき契ならずや夢になせ

これについては、天満宮文庫本『壁草¹』に

「空 うくつらき契ならずや夢になせ

「空うらむもはかな花に山かせ

とあり、連続する三句が復原される。宗長と宗碩が同座し、句の行様は恋から春へ転換している。

『宗碩付句』は、永正七年十月二十日何人百韻の句を含み、永正八年から永正十一年頃まで、遅くとも永正十三年までの成立、『宗碩回章』は永正七年十月十一日の日付があり、『池田千句』の句が付句七句、発句一句が確認される。以上余語氏の考証は、動かし得ないものと考えられる。

こうして、小句集三点は、出典を確認できる百韻、千句がそれぞれ一つか二つしか見られないので、いずれも比較的短期間の句を集めて、肖柏・宗長の両先達の評を請うたということになる。

以下宗長の評をあらあら検討してみたい。全体を通して合点を付しているが、その数を点検してみよう。写本が転写を重ねるにしたがって合点そのものの誤写は増加すると思われるので、末尾に記された集計に従っておく。まず『宗碩百句』は付句百句、発句二十二句からなるが、「付墨四十八句 長四」とある。『宗碩回章』は、付句八十五句、発句十句であるが、平松本では「合点四十四句 長三」としている。ついでに『宗碩付句』は付句百二十二句、発句三十五句、肖柏はこれに「合点五十三句 内 長一」という評価であった。連歌師が素人の数奇者の句を批評する時の合点は、はげましの意を込めて甘いものになることもあるが、宗碩に対して両先達がそのような態度で臨むこともなからうし、宗碩自身そんなことは期待しないと思われる。とすれば、いずれも五割前後の合点を得たのは好成績と見てよく、宗碩は自信を持ったものと考えられる。ただし宗長は、『宗碩百句』に対し「珍重拔群之物候」と誉めるものの、「猶今少幽玄所被懸心候者肝要候」と、苦言も呈している。『宗碩回章』でも、「数篇沈吟候、本望唯逐面様ニ面白候」と、文脈必ずしも明瞭でないが一応誉め、ついで「余に案し給候事、無余情幽玄も候物おほく見え候」と指摘している。

「幽玄」「余情」といった歌学上の語が、永正頃の連歌師にどのようなとらえられていたかは、いまだ研究が充分とは言えず、今後の課題としたいが、具体的に句評として使用された箇所をあげておこう。

『宗碩百句』発句に、

205月の秋残りさへそふ今夜哉

有心幽玄殊勝と

ここでは「有心幽玄」と並記されている。付句では

145 心のおくはなにかわすれん

146 花にいらはしほるもよしや吉野山

心のおくに吉野の山勿論候

但今少有心なる所あらまほしく候

177 月うすくなる暁のかけ

178 灯を猶ななき夜にかきたて、

一句無余情候哉

有心、幽玄、余情など、和歌を論ずる時使用される語をもつて評されたのは、このくらいで、この程度の用例から宗長の真意を忖度するのは控えておきたい。

4

その他の評をいくつか見ておくと、賞讃の語は批判のそれに比べて少ない。『宗碩回章』（以下『回章』と略す）には、そもそも褒辞が見あたらない。合点しただけで充分とされたのであろう。『宗碩百句』（以下『百句』と略す）では、4「此眺望無比類候珍重候」とあるが、「珍重」なる語が、以下16、72、162、219などに見え、理想とする風体を論ずる文言はない。52「墨毎句のやうに候へは是は閑筆候」とあるように、基本的には宗碩の句を高く評価しているのであろう。

引歌、あるいは本歌については、以下のような例がある。『百句』

49 幾里もまきれん峯の花ならん

50 梅さく山にほふ松かせ

家隆卿詠面影うかひ候

『新勅撰集』四〇

いくさとか月のひかりもにほふらむむめさく山のみねのはる風
を巧みに取ったとの評価であろう。

同じく

71 秋はすゑの、むしのこゑく

72 霜枯のお花くすはな吹風に

万葉の風珍重候

『万葉集』一五三八、山上憶良

萩の花を花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花
を引いたことを「珍重」と評している。

その一方、

171 花やみな心くくに咲ぬらん

172 ひとつみとりの野への春草

あまりに本歌のまゝに聞候

本歌の判定は困難であるが、『拾玉集』三五一五

あはれにもおなじみどりの春の草ころころに色かはりゆく

であろう。これはさらに、『古今集』二四五

みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色色の花にぞ有りける

を本歌としている。宗碩の句は慈円の歌を本歌としているが、春の草の一樣に緑であるのに、花はそれぞれの色に咲くということをそのまま取り込んでいては、「あまりに本歌のまゝ」というより外に言い様がなかつたのである。

さらに、『回章』では

今さらいと、老そかなしき

一一いかにせは身をはやなから春の花

前に本歌の心聊あらまほしく候

とあるが、本歌とすべき歌が何か、よくわからない。「老そかなしき」で結ぶ歌が為家他何首があるが、その中にあるのだろうか。いずれにせよ宗長の評は、本歌の取り様を明確ならしめよ、というのである。

一方、連歌の語句を利用した場合はどうか。『回章』

あれたる庵はすむもすまれず

七八今はたゝなきにしかしの身の行末

能阿句にやらん此作候欵如何

『新撰菟玖波集』三一八二に

よき事またん身ともおもはず

老ぬれはなきにしかしの世中に

とある。また『回章』の発句

七一声に月や夜わたるほとゝきす

等類候やらん不分明候如何

とあるが、これも『新撰菟玖波集』三七〇六

一声に見ぬ山ふかしほと、きす

と心敬の句があり、「一声」で始め、「ほと、きす」と閉じるのが共通である。

こうしてみると、連歌において本歌取りそのものは全く問題なく、巧みに生かせば称讃され、拙なければ批判されるということであり、その範囲も八代集や万葉に限らない。しかし連歌から取ることは許されず、『新撰菟玖波集』の作などはしつかり記憶しておき、等類を避けなければならないのであった。

5

批判的な評として、『百句』24の「つられれと絶ね人」について、「あまり詞くたけて間候」とあり、用語が俗語的だと言ったごとくであったり、98「付様耳なれ候欵」と、平凡さを指摘したり、62「つれなきに生れあはずとも輪廻はかなしかるへき事にあらず候哉」と、仏教教理の理解不充分さを示唆したりなど、さまざま興味深い。

しかし最も多い評は、「五文字」のことである。『百句』8・40・78・88・156・219の六度、『回章』四・一三・一八・五三・六〇・六八・書状の部に一箇所、計七度出る。この語自体は特に意味があるとも見えず、従来とりたてて考察されたこともないようである。『日本国語大辞典』は、「いつもじ」「ごもじ」の読みで二箇所立項し、和歌や連歌俳諧の第一句の五文字をいうとの意の語釈を加える。他の諸辞書も同様の説明をしており、引用の出典に『俳諧名目抄』の「いつもじといふべし。ごもじといふ人あり。わろし」という文を掲げながらも、あえて読みを固定していない。要はさして注目に値する語ではなかったのであろう。連歌論に目を通してても用例が稀とは言えないが、重要な語とも見えず、ここでの宗長の多用ぶりが目立つのである。

宗長評においては、五文字の詠み方が、具体的に評されることが多い。『百句』の評、

7 花にわかる、おく山のとも

8 桜にも木のもとすみは誰とはん

五文字不庶幾候

前句の、花のもとでの友人との別れに込められた万感の思いに対し、花を桜に限定して「桜にも」と受けては、一挙に感興がそがれてしまうということなのだろう。同じく

155 木の葉みたれて千鳥鳴なり

156 打出るわか門さひし秋のくれ

此五文字駒などのやうに覚候

前句、木の葉が散り乱れ、千鳥が寒々と鳴く景に対し、門外に出てみようとする付句作者の動作を「打出る」と表現しては、まるで乗馬の勇ましさのようで、不調和である、と言うのであろう。

『回章』でも五文字の語は現れるが、「面白からず」「あるべく候」と簡単な評を伴うことが多い。次の句に注目してみよう。

明ほのうすし青柳の色

四 水かけもおほる月夜にすみやらて

此五文字イカニソヤ庭ノ水カケとも何の水かけともありつへく候

明ぼの淡い光の中での柳の色彩の微妙さをいう前句に、「水かけ」の語を対したことについての批評である。ここでは水かけが具体化されておらず、庭の水かげなのか何なのかが特定できないと批判されているようである。平松本は、さらに「比興々々」と語を加え、よほどこの句が気に入らぬ口ぶりである。

『回章』書状部には、「五文字などに何のよせいなき源氏の哥の詞やことの葉のつゝきやなど打出られ候、愚意はいか、そや」とあり、この箇所を指しているように思われる。すなわち、『権本』の巻²に、

はるくゝとかすみわたれる空にちる桜あれは今ひらけそむるなと色くゝみわたさるゝに川そひ柳のおきふしなひく水かけなとおろかならすおかしきをみならひ給はぬ人はいとめつらしくみすてかたしとおほさる

とあり、匂宮と薫が宇治の景色を眺めている場面である。とは言え、これだけでは劇的な場面とも思われず、連衆があまねく記憶していることは期待できない。しかし宗碩はこの場面から柳と水かけの語の組み合わせを取り出し、前句の柳に対して水かけで応じたのであろう。それに対し、宗長は「比興々々」、あるいは「何のよせいなき源氏の……ことの葉のつゝき」「愚意はいか、そや」などと、きびしく評した。

五文字の語を出して、かなりの量の宗長評がなされているのだが、つまりは五・七・五の付句冒頭の問題なのであって、当時の連歌会席のありかたを想像して、理解を深めてみたい。

『私用抄』によって、執筆のふるまいを見てみよう。^③

発句 差定の好士のかたへ心をかけてすこし見やり、胸をしづめて待ちて、句を出だし侍らば、ねんごろに聞きわけ、胸に持ちて、尊宿のかたをすこし見て後、満座をもひそかに見めぐらして、のどやかにのびくとうらく敷読進あるべく候。口うつしなどに披露し侍れば、あられなくしなをくれ侍り。又、かならず言い損じ侍ることおほし。脇句・第三より百韻の句ごとに、ひとしく此用心あるべく候となり。

ここに見られる連歌実作の場面は、一切が音声としてとり行なわれ、文字を読み書きするのは、ただ執筆一人ということである。連衆一人一人が手控として書き留めるのが可能であるとしても、発句作者の発声を執筆は「ねんごろに聞きわけ」、「のどやかにのびくとうらく敷読進」する。「読進」を、木藤才藏氏は、「執筆が作品を声を出して読みあげ、一座の人々に披露すること」と注される。以下百韻全体が同様に進められる。すなわち、連衆の付句が音声として発せられ、執筆は差し合いがなければこれを懐紙に書き留め、読進をする。その時の声につき、『私用抄』はさらに次のように述べる。

請取り読進のこゑ、最大事なる歟。(もとより詩歌は、詠吟の声のうちに句のよしあしはあらはれ侍る物なれば、偏に句

の請取読進の程、あひだの遅速、品・声の色など大事なるか。いかにものどやかに声をほそめ品を心にかけて、しかもよはからずたしかに、末座までもれず、耳にとをり侍るやうに心にかくべく哉。読進の声によりて、秀逸などもさらにしみ侍らず、はるかにあしくきこえ侍る歟。

このようにまことに懇切に記述され、詠み方によって句の効果が大きく左右されると言われている。その読進の声は、「品・声の色」「のどやか」「声をほそめ」「よはからず」「末座までもれず」等々の記述があるものの、当時の実際の音調を復原することはできない。録音によるしか、賦詠の速度、節回しを確かめるすべはないのだから。室町時代の連歌作者たちは、実際の百韻の座でこれを聞き、自ら習得していったのだから、当然ながら『私用抄』の記述で何の支障もなかったわけである。

読書がほとんど黙読によって行われる現代においても、和歌の朗誦の場はわずかながら残っている。宮中の歌会始めの儀において、入選作は専門家によって朗誦されるが、長々と息の続く限り五文字が読み上げられ、長い間をあけて次の七文字が同じように読み上げられる。再び長い間があつて五文字が読まれ、また間があつて、下句の七・七は一気に読まれる。歌一首が長時間をかけて読み終えられるのである。

別に、競技としての百人一首では、読み手はゆったりとした速度ではあるが上句を一息に読み上げてしまい、競技者は下句の確認ができた瞬間に取りふだを取る。上句の読み上げはまだ続いて、そのまま残りの部分も読み終えることになる。その後かなり長い間をとってから下句が読まれ、次の歌の読み上げに移って行く。

現在和歌が読み上げられる場はこの位のものと思われるが、往時の連歌のそれとどれほど関連があるかは疑わしい。ただ『私用抄』は、「のどやか」「のびく」と「うらく敷」と言うのであるから、ゆっくりとした速度で読まれたというところだけは認めてよいと考える。次に五七五の各句は歌会始めのように区切られ、間を明けて読まれたのか、それとも百人

一首のように一気に続けて読まれたのか、どちらであったらうか。

それについては、『篠目⁵』の記述が参考になる。

常の百韻連歌の時、千句などの様に五文字出だす時、指令とて返すこと無下也。皆請取てかへすべし。

『私用抄』にも次のような記述がある⁶。

指合などの句返し侍に、若干の故実あるべく哉。高家・尊宿・少人などの句を、五文字より返し侍る、見ぐるし。

席上、出された句に指合がある時、千句であれば五文字を聞いた時点でただちにその旨を指摘し、不採用を宣言するのは普通のことであり、百韻でも同じく五文字のみでの判断がなされることも可能であったらしい。当時の会での句の採否は執筆・宗匠の裁量によるだろうが、広島大本『那智籠』によれば、時の第一人者宗長の句も不採用となり、それを惜しんだ作者は「かへり句⁷」と注して句集に入れている。当座における句の採否は、宗長ほどの人でも承服していたのであった。千句の場合、一日に百韻を三ないし四巻詠するのであるから、時間を惜しみ、五文字で判断せざるを得なかったらしいが、通常の百韻ではそれは無下のことであった。五・七・五が一息に続けて読み上げられるとしたら、それに割り込んで五文字で中断させ、句を返してしまうのは、あまりにぶしつけであったらう。したがって、五文字を詠じて間をおいていたと考えるのが合理的と言えよう。

逆に秀逸の句が出された時の反応として、鎌倉時代にさかのぼるが『沙石集⁸』の例を挙げよう。

彼入道（東の入道）、そのかみ毘沙門堂の連歌の座に有りけるが、
うす紅になれるそらかな

といふ句難句にて、多くかへりて興もなかりけるに、

あまとぶやいなおふせ鳥のかげ見えて

花の下の十念坊ありけるが、あまとぶやとうち出でたりければ、あは、つき候ぬるはと、心はやいひけるとなん。

難渋している前句に対し、名句が付けられ、五文字「あまとぶや」が誦せられた途端、十念坊が察知し、「あは、つき候ぬるは」と嘆称したことになる。ここからも、五文字を詠じたあとに、ある程度の間が置かれていたことがうかがわれる。

連歌の席上、付句を案じている連衆は、前句を念頭において作句を試みている。そこに指導者の立場にある宗碩が自作を吟ずるのであるが、先に挙げた、宗長に難じられた句はどのように響いたのであろう。まず、百句8では「花にわかる、おく山の友」を念頭においている連衆の耳に、「桜にも」の五文字が誦せられ、何らかの間が置かれる。花ざかりの花見を終えて別れて行く大きな空間が、桜の語で限定され、小さな局面になってしまうことへの失望が生ずるのではないか。や、あつて、七文字、五文字が読み上げられるのだが、付句の最初の五文字が必ずしも効果的でなかったということだろうか。『百句』156では、「木の葉みたれて千鳥鳴なり」というしみじみとした情景に、「打出る」という駒などがいさんで駆け出してくるような唐突さが場違いなのであろう。『回章』四では、「明ほのうすし青柳の色」に源氏の、あまり人に知られていない箇所から「水かけ」を引き、連衆を当惑させたことを咎めたと思われる。

五文字という語は以上のように連歌の実践の場に深く関係するようであるが、このような用例は他の連歌書にあまり見当たらないようである。といつても、宗長が独創的な連歌師であつて、個性的な指導をしたというわけではあるまい。別の例をもつて、考えをすすめてみたい。

『回章』五二・五四に、「一句いひにく、候」「これもいひにく、候」との評がある。今日、評された句がどのように「いひにく」かつたのかは判断に苦しむが、言いにくいとは、読み上げもし詠じもしにくいとあるしかあるまい。句の作者にとつては言いにくはなかつたのであろうから、もつぱら他の連衆にとつてということになり、これも百韻連歌の席上にかかわること、なる。句の作者が吟じた句を執筆が受け、採用されたならば執筆がこれをもう一度読進し、連衆はこれを聞き取つて心中に反復する。この時のいいにくさをいうのであろう。

この考えの源は実は宗祇にあり、『回章』の書状部分に次のようにある。

句毎に案しくたかれ候哉らん、となへにく、候、常に、庵主是はとなへにくき句とて、愚句など殊にかなしかられ候つる。

宗長が受けた指導をそのまま宗碩に伝えたのであろう。五文字の語についても、恐らくは宗祇の指導に源はあるが、今のところ用例を見出してない。

以上、宗長評を通覧してみたが、「幽玄」「余情」のような和歌に由来する語と、「五文字」云々の評をどのようにとらえ

るべきだろうか。それは、もっぱら連歌賦詠の当座にかかわるか否かに帰着するであろう。「幽玄」などの語は、『連理秘抄』『筑波問答』『ささめごと』といった最も重要な連歌論書に現われる。歌論に由来し、能楽論にも伝わって大きく日本文学全体に関わる。それに対し、「五文字」はまさに連歌の当座にかかわる語であり、七七の前句に付句の五文字が読み上げられた時のことである。「幽玄」「余情」は前句に対し、付句が完成した時に、はじめて論ぜられるべきで、一組の前句・付句の単位がその対象となる。付句が採られた当座、百韻が完成して通覧された時、さらにその句が句集に入れられ、撰集に採られた時、どの時においても幽玄である、余情がある、と評することができる。しかし、連歌の当座の論理は付句の五文字が発せられた時すでにその句の成否を判断できることがある。それが「天とぶや」と発せられた瞬間のその場の感動であり、逆にその五文字で不採用が決められてしまうような千句の当座の一場面なのであった。宗長や宗碩のような時の第一流の連歌師の出座した会、多くの連衆にとってこれは一生で一度のことであつたであろう。彼らの発する五文字は、席上注目の的であり、こうした期待の中で、句が誦せられるのであつた。宗長評の面白さは、当座の五文字のきびしさと、句全体の読み上げを待つて検討されるべき「幽玄」が実現されるべきだなどの要求、その両者を含み込んでの複眼的なありかたにある。

8

宗碩は永正十七年、自作を百二十番の『連歌合』^⑨にまとめ、宗長の判を求めた。『百句』と『回章』は宗長の指導を仰ぐ目的もあつたろうが、『連歌合』となれば一つの完成作品とも言うべく、それなりの自信もあつたことであろう。宗長は、ここでも「毎句金言拔群の物なるべし」と賞讃しながら、「五文字」の語をもって何箇所かに批判を述べている。例えば五十二番右^⑩

右

ひかり浪よる池水の月

をしたかへ堤をゆけはさはく夜に

……右又五文字をしたかへ一興には候へともきゝなく、候也

ここでは、以前『百句』『回章』での批判と、同じような評が与えられているように見える。しかし、永正十三年『十花千句』、同じく十五年『東山千句』、正確な興行年は不明ながら永正期と思われる『池田千句』において、肖柏・宗長に次ぐ句数を出している宗碩は、もはや一流の連歌師としての地歩を築きあげていたと見られるのであって、宗長に何と言われようと、自身の作風を変えなかつたということではないか。「をしたかへ」なる耳に立つ表現をあえてやりたかつたのではないか。

『連歌合』の句は、もとより当時の尋常の作風で終始しているが、九十番^①左、

いりあひのかねにとをきかへるさ

けふ行も又けふゆくも旅にして

など、「今日行も又けふ行も、誹諧めき候」との宗長判がある。そのような反応を恐らくは予期しながら、この『連歌合』を編んだのではなかつたのか。またそういう常套を越えようとする宗碩の一時代新しい感覚を、宗長は宗長なりに認め、大永二年の『伊勢千句』において、両吟の対手として対等の存在と位置づけたということなのだろう。

注

- (1) 古典文庫『壁草（大阪天満宮文庫本）』24ページ。
- (2) 『源氏物語大成』卷三、一五四九ページ。
- (3) 中世の文学『連歌論集三』三五七ページ。
- (4) 以下、『和歌を歌う』（笠間書房 二〇〇五年）によった。
- (5) 中世の文学『連歌論集四』三一〇ページ。なお文中「指令」とあるのは「指合」の誤字か。
- (6) 注3の三五九ページ。
- (7) 古典文庫本23ページ。
- (8) 岩波文庫本上巻254ページ。
- (9) 『連歌貴重文献集第九集』によった。
- (10) 同書五五〇ページ。
- (11) 同書五七八ページ。

(文学部教授)